三七
剣傳

南柯夢前編

三

昌平
6
2/4

600
214

全傳南柯夢 巻之三

東都　曲亭馬琴編次

臥房の胡越

光陰矢のごとく。又梭のごとく。秋去春来たりつゝ。蟻松典膳が女児園花は既に十五才ばかりとなりける。父の典膳は。豫ねて赤根半六が一子半七を。女婿育まんとぞ准備のうちをもつて。主君続井順昭へ。ぞり〳〵彼親子がうわさを吹聚す。ある日又たのうんぞう。半六五條の村主を兼ねたりしも私のうへ加之児子半七は。文武の才藝人に超たり。僕日来その挙動をうかゝ小。近習に召使れて。ぞうるべくもの秋。夫俊徳を明かして。能を挙て不能を羽ねのうへ君のこゝろあり。ぞうれども民流弘横つゝく。渡すものなくして。俊先も又燕石に芬をうん。賢を蔑ろに愚臣が微忠を。用ると用ひざる

とも。尊慮よろさるべうやと言語を竭くせえあげうべ。順昭られを諾み
ひくするのち半六より五條の縣守を兼ねて。新より半七を召せて。嫡子吉雅丸
の近習ゆゑ召使れる。典籍見顕員の使ひをとりて。彼親るを汲引すこい
ども。半七ゲむざを怜悧て。忠孝抜群なるゆゑ違ひどもの為体をうんく。
老臣もられがたよ。麦主君もられ対して容を改ると妻うりさるようて
半七いく祝もろく近臣の上よすくと。職禄忽ち父より起たり。続井の家嫌
妻る中より。文武の道よむを委ね。忠信を三るのち。夏人君二郎を夫友春
と赤根半七とのたえて宿を決る人なり。そろそろ半七ハ今茲四つ二十
そろその年紀をりく論むるとも。夏人君も係るとく。ひあるのこれ
を称讃ざるいうとそ。やくとその年の終より。蟻松赤根の両臣。その子の婚
縁を主君願ひまり。明春園花を嫁らして。泰晋の好を締んとて。彼小

媒妁の男をうらん送るとの用意をうんいくるそのとき半六ハ。ろをを
ちりく招ひとの。蟻松氏いろぶ親よりハ恩人なり。既よとの蔭を蒙ると
久し。備彼人の吹挙よりくびハ。それも山児ハ。杓果なんそれさく。恭
ひよ。此度最愛の女児をりく。身より妻ちんと定ハとりく。今日ハ孫さらふ
吉日なれハ。双方の願書を上るようとの。
ゆくりとハ。半七ハ。ちそく父の顔をうち瞻て。仰ゆゑ。某ひり
母の遺言よりく。おさんと姫日縁を結びしと。彼不幸ゆて猛獣小御去
らる。ちりとりくども。今より伝るや死ちりく。万より一ツも彼女ゆ。恵ゆくて苦
ゆ。母の遺言より悔るのこうくべ。彼より對して不義なり不信し。男より三十
ゆくく室ゆりとりくハ。妻を娶るゆちるべ。遅うくべ。ちくくちひめびして後小
回答くまるべるよ社とりひも果ざるよ。半六忽ち気を変くえたるぞ。

ちひろ〜〜ん。吁くとうち笑ひ。自身がいの不理あるよ似たれども。ふ迂遠し。今
より千とおさんがうよのあるさ〜〜ぬ。ちの誓縁を結ばず不義なりのよせん。彼
荒熊よりこれ。その尼を索りどとらどもこそ八九年音耗う。粘たる糸よ
荒い屋ともそれが在命と帰を来んに日ぬりともおぶえどさるを假初の
義理よ西鶴がれ。女よのねよ孫の後栄をありのざるの愚と。且上世ちの人
究く命長〜。このゆるよ三十ようと娶るとも遂うしぐ降わる世いちく〜ど。
人生五十年。七十い稀さ。ちくうりを生ヒざれば。父母衰老〜〜。そのよを
教るよむゆうどに自身を向ちられば。和漢の故實いちそれべ。ちうれどもそ
い枚を定規ありつぐよ〜〜れとそ。ちくいんや。ちさん憎〜とくらの婚縁を結
ばちんや。ぐう〜思慮〜て悲ひをとりのひそとりふよ。半ヒいの月氏を低袴
の間よをさ〜ぬれ。黙然とて居たりしが且ちくいふぐ。慈のちんへ
ぬ。ちんちくとひくど。信義の係りとちぬ。ゆるよもすぐる。公夏よあ〜ぜ〜と椎家
よのるい。土ちるりの耶ありり。況ち〜一の宿老の婚とありる。肩を聳さんち
嗚呼うち〜。人の貪富い天ありり命ん。うちや生涯薪を樵て世をくるとも。ひ
情くい。朱買臣よも羨べりぐ。死灰の人よ愛せられんい。愛られざるよちりぐ。銅
臭を羨ち〜好を締い。禍の端ありり。ちぐ〜今ちぐ〜行せぬとりのをぬ六ぐ
もあ〜ど。大よ赤ち〜声をのりえやをれ。年七。世賢ぐちそ。ぐぐ〜ちぐ肩よ悔る。母の
遺言のくを重ぐて父を否〜。さちのる義理よ西鶴をち。親よ愛を失くちる。
何の書よ記〜てるるち。れ一且蟻杜氏よ約諾〜ち。の婚縁を定ちるよ。
今忽ぬよれを破〜ぐ。彼人豈ぐよ止んやれとて大なる禍の端のれ所詮
彼人よ憎ぬちぐ親よい活ぐ。是非よ多ぐど。とりてちれて面を赧ありり
又蒼くるり。猛よ力を引提ぐ。外面へ走り出んとすれ。妻を忙しく背を

仲〻と終の裾を引とゞめ。あん憤の甚しゝも。家の為をもとゝとされば。
ゆゑなきよめ〻び。三ゝび諫ゝく聽ざれば。跡哭〻と從へとゝの本文あり。此ゝゝ
ゆ意の隨ゝそありゝん。固辭ゆゞ〻。固辭ゆゞ〻。
氣ゝ一をもつゞ。ゆゝゝゝ

赤根手七
そのたね

ちうり弄眉のをのごう等閑よ行るべし。ようや身の愚うちり疎うとも。
生れつく彼然を玉んとの。ひとり行くべとりふよ。安恨いさもことの。とうち左衽つ
目送えちうり。かくと園花五條よ鼓れ。婚姻障ることもう〜整ひつ。洞房花燭
の景迹いうさ〜〜〜さよちうの省れちういらど。園花い稚れちう。えう〜えれ
りて生ぐちうれ〜ちうの。このへうぐべ。とちうふ誓〜嬪夫うちう。年紀い二八
の春ゆと。容止いと艶妖よ。むざまらと怜物うれ。又年七い今茲九一才ゆと。
顔えの端麗ちうる。梨花の雪とも欺くべ。文武よ宏才ちうるゆ竹林の
隊ゆもうべ。往古うり佳人いオよよ因ぐうく。駿馬い佰樂よ遇ぐど。ちう
夫婦い寶よ天縁ゆりとと。或い義く。或い蛇〜とちゆりのも考うり。赤根ぐ
家うゆ帰寧唱男入の吉席よ月敲へ。夫婦うん〜〜睦〜〜ええ〜ぐ。
典拠も敷恨もうん。壻を擇ばたうとく。終ぶを限ちう。安恨いをうり。

立條へかくを。分のうゆ〜えという〜ちう。世の中の親らちうゆ〜ことゆ〜めち
ちうよ年七い父の命よ恃ぐさと。此度婚姻いうたれどゆさんが生れを定
ずい縦毀の年い稚ちうとも。徒〜女ちうゆちをい稚さ。とちひと〜ちゆれが空を花
を娶えとも。たえう一夕もひとちうよ。眩らどされけとう又強面気をいんちど
〜と。昼い殊さ〜ちよ。徒ゆゆ〜相語ひ。中ちとちうちい席設隔う〜ど。食すちうと
い折布ちゆ〜ぐと睦〜〜えゆちるほどよ。ま六いちの形勢よあちかう。偶よ談び
ちぐちうめの言語ちゆ似ど。園花と眈〜ちうちうゆ。ゆ〜のど〜ちれがちぐ家
の幸禍ちのうゆ〜ひとう〜いちう蛾松よ侮媚ぐちうの新婦を宮待ちとと。
兵賓客のぐ〜ちうされが園花が兄曾を帛もちう〜〜奈良ちう来ちう
と。ま七と交参ちうん〜〜昼ちうど。藩中の諸士赤根親ま侮ちうのゆ。
却阿諛らふちうど。羊七いちとちうちうゆちうひちう。さう行〜ま堂を花い。ちうよ足ら

ざる所あれば。鄙を隔て。離たを掻くがごとく。又唖子の苦を舐るがごとく。
迫れどいひもろ〳〵さど。疾いろづく山雞の尾上の月と在明て。對ふた枕
を恨つ。春もすゑ暮ゆくに。四月ゆもうゆけそめ。紙ハ日の長に限る
れば。ある日夜浪ハ。蚊蟬をわく。ゆくり五條よ到つ。赤根ゆ水よ音あハする
ふき六ハ奈良へ出仕しく。羊七ハ園花とくもよ。小竹ゆ家よ居ろうを焚蟬
がちうせ〳〵ゆ夜浪ハ。從者を出居のうくよ行。案内もさもゆ出ひとり。羊
用もなちたる亮隔を。二隔ゆうり越てあく〳〵小。女児も皆もられまゆちくゆまた
ハ紙窓の下よ。物の中を覗〳〵と見ろうりもちゆ。園花のほとりよ行りて。
竹やうんりのいひぶけるれば。ろた夫婦のさ〳〵對ひ居ゆ。ち琴るさんハ。
むたゆて所なゆ。ろひく。爻も入〳〵ゆ。ゆほ亮隔の蔭よ立在く。扇を半押
ひ〳〵胸のあくりをうちあゆだをりく彼処を闕窺たり。空を花ハまたよりの

ひあくゆうりうんくさく出と茶の茶枕ゆも水偏らとたゆゆ。
あくろ夫よ對ひ世の人ハ物よ奈り拵山たく日をたくと頃ゆるよ。物の中
のくうんあちゆ。ハ身のあくよあくりうんゆうりゆがあさうたよまくうれとたんたくし
めさんれゆや。ゆ〳〵ひたるけくもゆりあハめといひけく。さ〳〵出と茶碗を。羊七ゆ。
ゆをくくよ禀く喫をくりくハ終日の休暇ゆれば。ゆりたれて。ぶ園えく
またる草紙の拵ゆくく〳〵日の園ゆをたくゆざりゆれりハれ身ことうち寝ま
居ゆ。倦もたぬひりめと回答するよ。園花ハ。ゆほいらんくていひもゆと。膝のあく
ゆくよまゆりのゆ。くくつたゆゆくくゆたくゆ。園の留奇南の稜をとめくほ〳〵
さのゆぶ紬へ。赧ちひ顔を押めく。芽出〳〵根のえゆうゆくさをゆゆくふゆ。
慧ゆ中のゆとくよ。稱ねともゆるくたくゆ。牙の愚さよ人をくくひとゆぶさ。
んいのほ鈍をくれどくゆ多くよ桑ゆて春も過ゆ。百日よりゆ伏れど真の

情をえとぬぐぶさりとそれ又一トさぐ強顔もゆとえぬぐぐ情こ殺ーこそ
ぬぬ罵打ろくうり苦ーく仕り。夫婦の縁ーい出雲よくく。神の結ぶとぬぬ
とぶぶがうとぬのこうる。筑摩の鍋のうぬぬどよ結びも果ぬ縁ーいあと
ともに吉備の中山ろくーよぬぐ俘の海の鯛ろくで俘ろる恵いぶこそうぶ。
貞女両夫よ見えぶと稚化ろりそれ諭されぬ又稚化ろり親と親ろぶどろふ
詩ち。嫗夫とぬぐさくちてさぐるうる。むつたきこのぬぬ行も懲ーも
志ぬろぶぬくそぐ物いちひ化ぐぐ。推辞がくくと娶ぬぐぶ豫ろくうぶむ
ろと花の葉よ道をぐぐとくく。出ろくぬけうーのくぬのこ愛くーげよとた
ぬぬ欲帰ーとぐぐど恨ころぶ。ろとぐひとこ位むろり目睫もちぬ枕ぬ候
のかぐらぬ夜間もうーどひろこりて化野の露と消ぬとも一言の怨こいの恩
とたうこてもぬよぐろの出ろろも。深く歎化のろうくこみさを憐ぐとえ

ぬぐどぬ。ひでうーとだりよ一声ぬくと後況めぶ。ま七ぬろ歎息ー。縁故を
ぬえわぶ恨こぬぬも理ありそれ婚姻のその夜ぬり。桃席を共よちざろ。
化月ひとそーとどぐぶさくく忌嫌ぬよまぬぐぶそぬぬくくぬもちくちちぬく
どひーうど。明白よ出るとぬぬ親の非を挙るよ似ぬりとちんかくちんと躊躇
ろく踏止たる。ひ若ーさいに月ぬりぬのまて七ちと勝るぐれ。今い匿よ匿ぐぐー。
ぬぬ花をぬぬとも。ろくぐーも使ぬ。ぬぬ。抑ぬれ稚化ちさよ。結髪の女子
あり。母の末期よ嫗と夫の盃ぐさーぬひぬれ。それぬり先ぬぶ父の悔ぬそ。被
小親を失ぬねぬのぬれ孤を艱苦ぬ。成長のち羊七よ娶ー。月の罪を贖
んと。誓ひぬひーるもあり。ちぐめをぐぐば如此ぐぬり。終に詩れが箇様ぐく
とぬの孫のぬぬ。ぐぐく審よ説ぬぐし。さちいぬぬ。この故よぬれ此度の婚縁
をぬぐぐび三ぐび推辞ーどぬ八又蛾松氏の花よ絆され。更よ豫ぬの約束

を違ゞそ遍をあくべ。父の命よも叛ゞく。又彼女子ゞ恩義棄ゞ。件の
女子い九才のとき荒蕉よ徇去られゝ。在亡定うゝゞとも。ゝゝ至ゝ年未の
志を轉さんい不義ゝり。所詮ゝゝゝゝゝ矛盾ゝ要ゝゝ。父のゝを安くし。
夫婦の名のゝゝゝ。枕席をともふゞ矛ゝゝゝゝ父母よ告ゝ。奈良
ゝ帰ゝゝゝゝ。旦ゝゝ妻とゝゝゝ。ゝゝ鳳の未通女ゝゝゝゝ矛ゝ損
ゝ。堅ゝゝ殊よ無を著ゞ。ゝくさんゝゝゝゝゝゝゝゝゝ強顔ゝゝゝ
ゝゝ。浮世の義理の絆ゝ。終よ結びゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
奈良ゝ帰ゝゝゝゝ。一ヶ日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝを雑別ゝゝゝ。信ゞゝ。一生倘ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
謝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

母児が誠ひを[illegible]思ふよ思られぬ一声傳らと咳よ[illegible]ひする人ありとん
く。羊七も園苑も猛よ形を改まど。落る俟と伎顔を給らとも[illegible]
[illegible]。

華陰の僑居

陪処よ。あるじ羊六。奈良より退れ来く。出居の方る伊豫簾を掲ぐ[illegible]
園苑が母君いつの程ぞ訪せ[illegible]ひし。ま[illegible]七いるどそ。[illegible]も迎ざるとらのよ。[illegible]
[illegible]に乳ぐとを[illegible]ちと舎矣く。いる。[illegible]も共今[illegible]
もいとぐ[illegible]ぐ。[illegible]が奈るい常の[illegible]ら捨[illegible]く休足[illegible]
[illegible]彼の声を傳ゆ[illegible]く。夫婦いとく[illegible]り来つ[illegible]
[illegible]とも一室よ入[illegible]く。賓主の坐を[illegible]ら寒く暖を述妻否
を問よ林女婢茶[illegible]を来く敷浪よ[illegible]

羊六そ。[illegible]よ對ひ。今日猛の仰[illegible]ありぬ伊をも召さるべれど。頭のと
うれびあのれよいと[illegible]をりく立りぬ。豫[illegible]ぐ。郎君
吉雅九い。貧弱夕病よ[illegible]十八九歳よ[illegible]童
だちよく[illegible]するべ。[illegible]よ近曽疱疹[illegible]乳[illegible]。旦暮龍
[illegible]ちよ[illegible]醫療もいとぐ驗[illegible]老臣設合[illegible]
る頻ひよ。[illegible]の[illegible]よ出[illegible]進[illegible]
とるべ。その功鍼灸茶餌よ勝るべ。と[illegible]大殿詩ひ[illegible]
び階ちよ落く上せ[illegible]。猛よその用意ありぬれども従者駅召倶
あらぶよ[illegible]ぬと寡し。近臣共三人と定ら
[illegible]その徒よ。今市金八郎。布施螺九郎と。今一人い羊七。老[illegible]
ひをられんとく。物馴たる壮佼のを撰ぶとられぬ。[illegible]を用ひ

守傳たまへとの仰せなるぞと伝へたまへば、まゝ七は頭を低唯々として
命を稟、まゝ六又茂限に對て、呼せあふがごとくうれしがるもまゝ七はこの
秋の季まで洛にあるべし。姑さくまたまうがれに弱れ女をひとり在ちんは
いとむごし。母はのこゝに来たりとて幸ありふたりは園花を奈良へ伴
ひて、羊七が陪ふまでぐ。頼ひとしんやとは敷限は今ほのかに伴ふ
もあれば、ふたは便りとなくども。女児をこゝにあるべきはいとまれ
ぞ。
せるうち應ーとはのせ。家のところ〳〵がありのよあるべ。されどもの羽を
陪へんはあるほ早し。まゝ七が鹿島立を目送らしてこ。奈良へ伴ふべし。園花
さはらぬとはいとうくえんとはば。女児はんとのうの魚もらどいろ懶き気
色あり。かくて四五日のうち、古稚華洛へ啓ぬ。ぬばはまゝ七は園花に別を
告げと男姑に泉の暇をもらひつ。同僚布施今市ホりとともふ。主

君の轎に引そへて。若葉うるはしき夏の空。時は四月の中旬なり。星とび
らある黎明に。雲間をとる杜鵑。ひとこゑ鳴くと。園花が身にはい
ひあはして名殘をしさと本意なさに。血を吐ごとく歎くもさる花に家
限は緣由を典侍に告。女児を奈良へ迎とりしがひわる日竊ゆゝしき
義を守る緣故。夫婦が同答を審にとりて。整へた憂ーとるびはその志の
極へざるに感激。又一トしをびはまゝ六がかくるをとゞめて匿して年未さな
ざるよりひとらくられがたるに。女児の一生を悔ちとはふに腹らしさも
いやましが威勢ふるく迫るとも。公ゆうねりの男女の中なるに恋にはひで
く。女児が久後あーりねばたうとく。夫にもゆえたまへば園花にも同じ。
あるゞ歎たまふ。宋のたびゞ嘆息たまふ。ゆゝ花に園花いはく
ゆゝもいがえにはいとゞ身を焦す。懼の蛍もはれなく。六月のころ

吉椎
赤根手七

ちゝ特みて〻〻井弁〻〻さんべと〻〻終日臥をとゝめ〻〻ど父母いとれど
乃〻茶何られの〻〻さまぐ〻仏祈禱せども。想〻〻病〻ぐ〻〻〻醫師もと
んもぐ〻〻後〻〻常の〻〻とゝ〻〻一日八起。一日八卧。顔のほそりも日よ
そひね見いさゝゝ〻〻ま七〻〻郎君を守傳〻〻。洛よ上て。洛東祇園の
社頭〻〻〻〻の別業を購〻〻〻〻〻よ僑居さ〻〻進ら巳続井家の郎君
〻〻〻〻〻

借りて、その身は一人の奴隷を倶して。其処より引移りて保親をその処に今
市布施ホ吉雅と密語まうしをまうしまさむ病頻ふうを奈良へ告ぐ
せむ。老臣ホひりとうりとく。別人をもとめく。彼より代るべしその人
り君のにとうより稱ぬものどもをそあらぶの風景を殺しゆうんち。
瘧病はたうと三七日を限りより愈るとのくべ見くらのうを奈良へ告ぐせ
でも。某ホ二人かくてあれば何の障りゆぐんたと信ぶらくうとまぞ吉雅
呼んく。まうりうり。終よりそのうと奈良へいせぐ。まセうもらのうりうり
をねさるふどれも又いくはもあらぐ愈べたよ。告ぐして父も妻よりも。
物をとりもよりとく。全宗ホたくらもつぐどらんぞ全八蝶九郎
ぐさまくの計較しく。主君より侵酒をすめたる張本とおりよりりそも彼
今市全八郎布袋蝶九郎の両人ハ繞井譜代の郎黨なれども。その

ひざまを手ヒうの安下より苅りて。實より奈良坂の児より相ひと憎べた侍人
うり。彼ホハ上より父母ゆ。下より妻子まくうく。只言を巧うと君を欺た。
他まぞ媚て。傷難をとりまうり。夫信言ハ美すくぐ。美言ハ信すくぐ。宜
うり侵言ハ。耳くたて蜜のどく。吉雅先ゆ年少軟弱の公ようより。
とれを慮らど。彼両人を寵をて。二うれのとり。因て此度の従者ホ
も擇をし。却ま七をらぶちくとうの気をるるよ。ま七猛ようぐらしく。
條の袋宿より退たくうぐ。全八蝶九郎ハ其の隙をいて。吉雅より拉奥を
すくめ。まハあのれくぐ身の樂りいくく。剃りのころ。俗より名くくろ家く
夏ぐ女児の小夏。第子の三勝うんど。鞍ようび集合て。昼夜酒宴より
すくよ。れてく三勝ハ。兄の中ゆる兄ようて。ートくび笑ぐ。城を傾るの美人
されぐ立葉より形容ハいるくの妓王・仏よりも勝るべく。愁を含てうくとて

華洛よ
遊ぶ
古雅住國

雨の俤裳に春の鳥の鳴がごとく故郷を慕の池田の鹿野父を索まとりし。鎌倉の微姦とりかとも。られまハ不及とうえーりぶ吉稚僧に眷恋しく。とし恋ひろ気をあるを全八蝶九郎とゆ猜して。言の叙に主君に私語もし。おのれら媒つるべとて。聽と三傍に。そのうをらひたるーさまぐに嫌しー誘へども。三傍ハ辞ることもれ結ぶる夫に遊びハ。寡婦に果まんとて定めーらまれば財妻化人も森非ぐ又見流士もえうりびとぐく金銭ばかりー桃を威勢に乗ーーー遍る人の席へふぐび来たるまるりー行く。今佞人多が。主君のみに情を述るをまるうち腹くそ。一言の意ともなびどその席の果ろばそくぐ拭頬ーとーーーの後ハ嘆くども絶く来たらぐ全八蝶九郎ハ。ありのに違ひくーりんをべまられど。彼ハも同ハ

ぐ主君に翌の夜あらーーーすべーとそうーーつる玄のびぐくに二人密ゆに従合ーにらのうくハ鞍の金をめるくに三傍が牙を贖ひより外なしとく猛に興猶う方へ書間をかうり。用金のゆをらひ遣ーね鄙イ米七が五條に退ぐくーうり吉稚の性真に費ひ金ゆくのゆまるぐ或ハ五十金。或ハ百金。彼のるまにらひうらくぐびく良ひり元しもるに米七が名を書加ることどもその人ハ絶くられをたくびくく吉稚ハ今僑居ーくーうぐ寡くーとくどもえ朱門のるまるれば金銭をまるに浅をまるぐとーーど美くハ二人の近臣に掠られ縄ーられる臣に行く全八蝶九郎ハ既に奈良へ金のるハひつるつぐ三傍が親をびひく。縁由をたーちんとて不三ぐ米人をつるつーまられど未だ有へ二人ハ去に焦燥ぐち連ぐらて二條門辺まる笑松が孫に到て全八郎

まづ門より裡へ入り。蝶九郎が外面へ立在て。その容子を張ひ。時宜よろこぶ。共へ平三を親伏んとて。全八郎が。あづけ置たる。てらふ。俗ハ世へ憚ある猿まれが。主君の名ハ忘れど三勝を愛ゆゑとのあるり。身を贖ふ。傍妻へせんと宣とるをのろ。この紙相語んゑ来まろ。身價ハ幾ばくよりがてよ。さてもべ。辭くの身みるこよるゑ僥倖まれが。領に来仔細あべろ。平三ゆめて。冷咲ひ。某女児を舞くハひさもれど。汚穢ところと賣る。身の安楽とおのふのふあるどう。やとのゑ三勝よりひろるとも。彼ハ結髪の夫あり。志金石ろ堅。まびいふとも益る。是をでいくらびろ。媒をあるべまぢるるをのハせ一人あれども女児を来りどろん。回答ふる斯の如。この外よりべをるゆべたるゆ。そくなりあくとらひけて。

つと奥へ入りしぶ。全八郎呆果。立ちもるく外面へ出る。蝶九郎へ走ぐのうを告るへ。蝶九郎ハ跡を追つ。ろとも物蔭へ到りさくらみんとひふへ。全八声を低し。彼平三とやうん。憎さげへ回答ふ。主君を続并の郎君とちるゑ。やひ係るべし。されバとて主の名を明白ハ言ぐ。所詮ろのく三勝を奪ひとり。さて媒をあるる。身價をかるんへ。彼ハえ来俳優家ろり。ートとび猿を見ばいるでる点ぢん。さハあるぬ。とらくば蝶九郎つぐとゆる。ちろりとらくども人のちろろ量ゲさし。彼のく兼引ぞ。又うけ引とらくるる。その望数千金ろるぶ。元を吹疵を求かへあるどや。とらくを。全八ゆもめくぞ。辺りまぞるぶ肚裏を精せどぶ頻りへ三勝をさく。先しろ郎君へ假托て。本意を遂んと。ろくるり。かくらくハ面ゑ所行。ゑ三勝。ゑん命も惜ぶ。

今彼を牙贖しまつる。帝君よ進まつる。世の栄えを悼まぶ大和へ
はるばる行ぐ。その用ある時よりしあらじ。妻とまんまは今ぞ
ぐ行くなり。m辺又られを助ぐ。この件のみ朱就せず。昨日奈良へらひつつ
ぞ用金ぐ。そぐ。その懐へ挟む。故ひとりまぶ。途中あどよ埋伏
しぐ。彼女子ぞ奪ひまつれよ。誰ぐぶ仇のぞるとぐぐん。ぐぐされば牙
価をまつるまるぞ及ど。よりや卒三られを暁ぐぐ。女児をまつ寝さんと
聞まつる。這奴を紙引出ぐ。撃敢さんはらと易し。と信ぐぐぐ密語
ぞ。蝶丸郎ぐよ敢ぐ。一後ぐも及ど。かぐまぐられは黄金をまるれ辺ハ
又英人を得ん。ぐぐまも考ぞ捜ぐまる。この謀究ぐ如くとぐよ。偽ぞよ
走率めぐぐ男。忙しく走り来ぐ。卒三ぐ家ぐ門のまハ管領晴元
朝臣のぐん使ぐ。今夜猛ぐ。賓の来ぐまるぐ。ぐぐぐ三猪と及ぐと

宜ハまつるとぞ。黄昏ぐる頃。迎の轎を来ぐぐん。その准備しぐ約ぐと
ぐひ果ぐ。又忙しく走り来る沢。全ハ。蝶丸郎ぐ密語ぐ。物蔭ぐ潜ぐ
出矢庭ぐ彼男ぐ頂髪を掻廻ぐ引ぐ。芝卒ハ文ぐ驚ぐ。これと一声
いハせるあぐど。吭をぐく締ぐ。まぐ足と両撥ぐ賭をまつさまあ。
忽地ぐ息絶ぐ。そのまぐ蝶丸郎ぐ。彼男ぐ衣服袴を
剥ぐ。二人とぐ。屍をほぐ近ぐ。叢の中ぐ投入巻ぐ。
後ぐ。又どぐ逃ぐ。卒三ハ官領家ぐ居ることをいん
ぐ。三猪ぐ舎ぐ。往来の人ぐ迹絶ぐ祈ぐんぐ。かぐとぐのの
まつりとぞ。

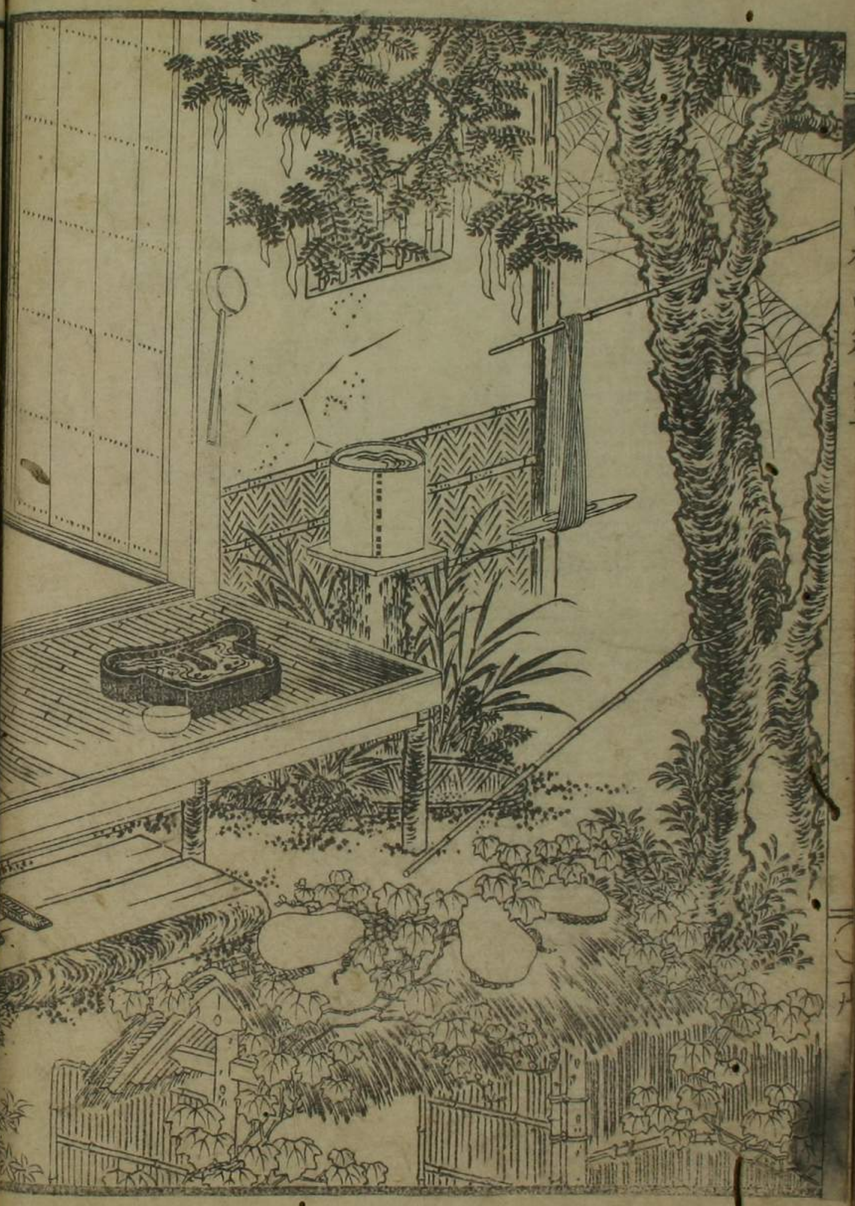
疾轎の驟雨

さても赤根ぐ七ハ。五條の旅宿ぐ。病ぐ三十日ぐ。頃日

全八郎九郎が。郎君の拵奥をもてめまく。鞨の舞子をまび集合
るもの。仕様。大工驚たこれを練んとする。気力もとろへ。起居
もなくよろせど。頻ふるの〳〵。焦燥つゝひさづゝ。八日をるせず。八月の
中旬ふ至りて。おこり果ぬ。翌八つとめて。鬢を撫し。祇園の旅
館ふ帰りて。その為体をえんやとして。その進物紙ひとしく。えく大和
へ音耗をせざれば。この日奴隷を奈良へつかはせば。ひとしく
云紫献もろた宿の。ものより後然ふ嬉ど。ひ〻求まーるをそひつゞけそ。
ふ圖往ふ熟ふ護身嚢をえ。ものより。これハもうんが
護身付ける。ものー母の送云ふて。護身嚢と。送代ふ出る。
ありくぶこれも爰ふ似ふ。そのとき母の宣ひ。仮ぶ成長の後俗へ上る
るあるべ。おさんが母を索ふ。少えぬひーふの紫ハ。ほ耳底ふ残

れども。ぶ母ハさえ。ふる在さ。これのゝ近屬俗ふあるど。問ふもうた
その人ハ。ふるもふ。ふるありやうーや。紀念とて。今ハ他ふ。ふるくハ忘ゝ
隙もありきんのをこ。雅ぶ。ふ。護身嚢と。学ぶ。ふる
ふ。ものとろ。項ふ。る。ものー。ふる。ものと外面ふ。咬ーく。ふる人のふる。
金の鍔ふハ庭のもの菊もけもうれ。野袴の裾ふハ。夕雪の玉を時
ー。祇ふ戸を押ふ。笠を捉。捨ふを見ぶられ。別人ふあるぞ。
厚倉二郎大夫友春ふ。ぶ。七ハ端ちゝ。出迎へ。ふ厚倉氏。行
ふのゝ。坊ふハ。ぶ。ふ。上坐ふ。清ぶれば厚倉殿
ひ。ふ。ふ。其。許の病ふハ。ふ。ふ。ふ。顔色也。
ふハ。年。愈。ふ。ふ。ふ

あづま根半七
屑大倉三郎大夫



それことやひろ。その所より退た。翌ハ愈んぬ。あさてハあとうら果んうとく。宿老へも使えあげど矢ハ告どうく。そひの外ニ日を過せうぶ。何人ハ笑ひひる。りと不審ることいそのとうた厚倉声を低くして。友春ごろのうをさうたるあい故あり。近曽吉雅君用金のうの。近臣三人の連署をりうくさびくやく来さうくを大殿うくくく怪くくひくく。某を召して。仮密ハ洛ハ到りそうのの侍をうくくく来ると仰せうべ。ひねる月の下旬うう。この地ハ来うくく。をうくく逗留く。金八蝶九郎がとくやようく。郎君のあん行迹うくくど。毎日ハ殿の舞くを見く。三務とやうん。ぶ可を贖ひうん。妾ハせんうくそれうのうの。さうのハ入殿の金を進ふさべきうく。例の連署大和く到来ちう。遥とうとれどもうけうのくべ。うんうう。大殿へ使えあげるりのやあうん。ん憤ぬうして。昨夜

猛ハ二郎左夫を召さん。頃日仮ハ。吉雅がうの所捜問ちうハ。笑の閑ある。いうう。ハ既ハ彼のめが偽楽放蕩。世ハあうとう。ハ審ハ説ちうする。ハ及ばど。このうの室町家うう制度あくくが家門の滅亡踵をめぐくして。ぶうくくび。汝いそだ洛ハ走ゆさく。吉雅主役をおくく糸ハとうれえづくく。首を刎ふくべく。後の禍を攘ふべくと宣ひく。ハ気をもどうくちく。そひ。ハくうのハべうもあくねば。畏く。この暁ハ未ハ良をさうち出。目入ちうハ来まうと。ハるハうう。ハ辺ハ病臥くうをる。いうでうちうざるうのあくん。やとうハぼセハ。ハをこと。うのうの毎ハ且驚ハ且憂ハ。ハを低ハを又ハ。そうくく。伏吟さうハゆう。郎君のあん行跡うう。くくくうう。この方病ハ犯さんく。練をるとをねどもそうくいひくう。用金のうハ于ハハ。某絶さうれをうくどさて。今市布施の侯人君ハ倫酒をとう。やをうくくゆくうう。びうん。ハ使ハ連係

しく。不忠の隊に入る敵。彼憎し朽木しく。歯を切て憤ぶ。厚倉
さるべく。其許の姓名を載せるとしくべる。件の連署一枚も。辺の自筆
とえ。えねばひとくに據あるべし。只いひたぐさに。郎君のかん恨なり。
これを殺ひそめんかん。忠臣その跳度よかろう。若内の計をなさば。
わたのうべど惜るべ。せんをべいありうべ。その人をねぎとらんよ。ま七
笑もめくど膝をすわ。ろいるる謀みくいで。某方を殺し
代を生るべし。そやく説もしまく。そうしまくとらそがせが。厚倉荒
尓とうち笑く。辺の志を揚りく。忠公二るるうがれく
るが為よ。実のうぶ胸中の苦計を告く。めるが行せんるよ来れる。
さらく。その方。ふ忠ふ義の汚名を厭ひそ。その謀を行ひべし。かくても
るねうぶりよ彼ひめよべ。と向よ。ま七答く。いるる謀えそぶねど。

かん恨をうぶ方よ負く。君を殺ひ殺しが。不義ともらく不忠ともらく厭あ
い射忠るくど。と云よ勇む日本ぶそしひふ。厚倉頷よ嘆賞し。そうしが
今宵いろみもしく。三揚とやくんを奪ひそう。いづ地へありとも立退ふく。
うれい又夜の中よ。郎君のかん供しく。ふ良へあり。さく大殿よかさあ。
彼縁故を孔明しくひが。吉雅君のそうそせるみあくべ。らぐくま
七が私情くり起りく。三揚とらく舞くよ惑溺しるくる雅君よ假托んと
較汁しが。既よその技倆發覚く。ひとくよ言語ふ。猛よ件の業くを
ぶくく逐電せり。かく登据分明ゐれが一旦のかん憤を散され。ぬ文子和順
云ゆうぶ。公私の幸甚しうんとおうさん。そうるうらをい。巷説街説。忽地
その趣を更く。郎君のかん悪名を雪ぐく。郎君をうり殺逃を慎
ゆひく。君家泰山のやとたよ至ぶんる。ぬ辺が孤忠よあう。ぺくて

あれ年を経て。その便宜を見あらし。辺の左衛門二郎を夫が命ぜ
ゆえあげ。めぐらし為糸さ。そうさんらう仏ゆくと説示せば。まもなく感傷し。この謀ひ易し。只うけがさをハ。彼葬ゝを奪ひ去り。一日く
とも。とつよ住まべ。真の不義よ仏ゝ儀らゝ。丈夫のさぐる所。
不便なぐさ教し。それ又遠ふその地をさゝ。自殺とぶ後の患もあ。
皆是忠義の為ハあれど。罪なさ女子仏教しくる。まもが命を損なべ。彼
女子の親族も。恨るとぶなべ。とのひも果ぬよ原倉ハ氏を左右
ふちち掉さ。赤根氏の言違へ。彼も又人の子。ぞうむぞんよ教と
べさ。ぞめくれそれよ係ふさ。不便をえ〻貪ゝとものろとふ
世を渡て。のるゆハ預ちゝぬ。三郎親子を引放。憂を又る罪障を
贖んとて茅士の所為ある。それ又方便をめぐゝして。彼が身價を外

るぐゝ。平三とやうんよろうもべし。血気よ乗しゝ人を教し刃を
失ひ。ゆゆ。と理を述てらぶもよ。まもをうけ引ぞいハ
とんどひしぶやうよ至て。仏ぞ。ふるぞ昔ぐうを。
さうそと密しゆく。某雄号時。結号さて女子ゆゝの
名をバちうんと。ゆびゝ。ぞ又ハ再生の恩ありゆく。不幸ゆく
九歳の冬。ゆゝへもよどるうしゝう。今よ存亡定るゝぞ。
ぞ近曽園花を娶りしゆ。え来ろ情愚よゆゝど。ちぐく又よ
逼ゝよゝく。その今下よ悔ぐく。彼園花を娶るとゝどもぞ。
枕席を共よせぞ。ゆうんが恩義をゆりゝよあり。ちう我よ今
辞ゝの三郎とやうんを使ゆ。所謂五十歳。百歳のくゝさんとの係の
ゆろゝく。夢年の志処轉べきゆあゝど。只ゝを一生のゆりひき

めとあぼされて。若くといひて便あれ。又は六が久後をぞ。
なるべしとまを腰よ延出孝を。神も仏も憐れ。端あり奪ひ給へ
の人。三勝ハ結号せ。めさんとそひもうけど。数人とらんもあれ
ど。厚食そ縁故をゆくハ練んやうもあり。比丘尼ハ壮士。儒者
を被せ命下さく。隕さるうとでうよ。傍うちうそとらんとは。狡の
昼の短くく。鶏も塒よ入相の祇園精舎の撞き声。老うう耳も
あらたまり。既よ時刻ふるりぬとく。廩倉ゆうう坐を立て。ま七を
えくりくどれいそや退るこ。ぞうこをもでよあらねども。捷りくる
損しのふ。とくがま七莞然とし。くく。易くちひあく。甲夜ふう
彼瓜を徘徊し。潛うつく奪ひ給へ。のー家よあくどはうべ。ふう
遠中よ埋伏しひづとの夜をてさづくよ。あうーいどと夕間暮八

月の天の定やう。ふだしい曇る雨催ひ。出べた月の出やうねど。客と主
が影二ツ。磨あげる武士のとれや鏡とひつべし。この日今市全八郎
布施蝶九郎ハ。既よ渠を定めう。管領家の支卒を縊仆し。直よ
その瓜を奪り出うう。日来恐りる孫呂世の猶夫足卒御卒と
ひ悪根よ。金を奪くとれを相撲ひ。日の暮くをうう。蝶九郎
ハ剥とし。衣服袴を被く。伊の老卒よ打扮。二人の悪根よ橋を
絢くくく。笑松が家よ到り。管領家の迎ふ。くく糸くと
りくとのとを平三ハ。真葛原よ到く。らまざ帰りねど。ぬんごと
ふをぬんおう。迎の橋さくのうくーを。ろをぞう杉をべき。又の
帰りのよ。行くもの。ドとう。三勝ハ夕間暮の公忙くさる。蝶九
こうとをもくど。會釈ふく外面よ立出門の戸頭くく。捷をべ隣る

ある根半七
慶応十五年
七月十日
ひさ松半三

布弦ノ喋九郎
今市布弦
夜三揚を
豪奢
今市金八郎
仕合吉

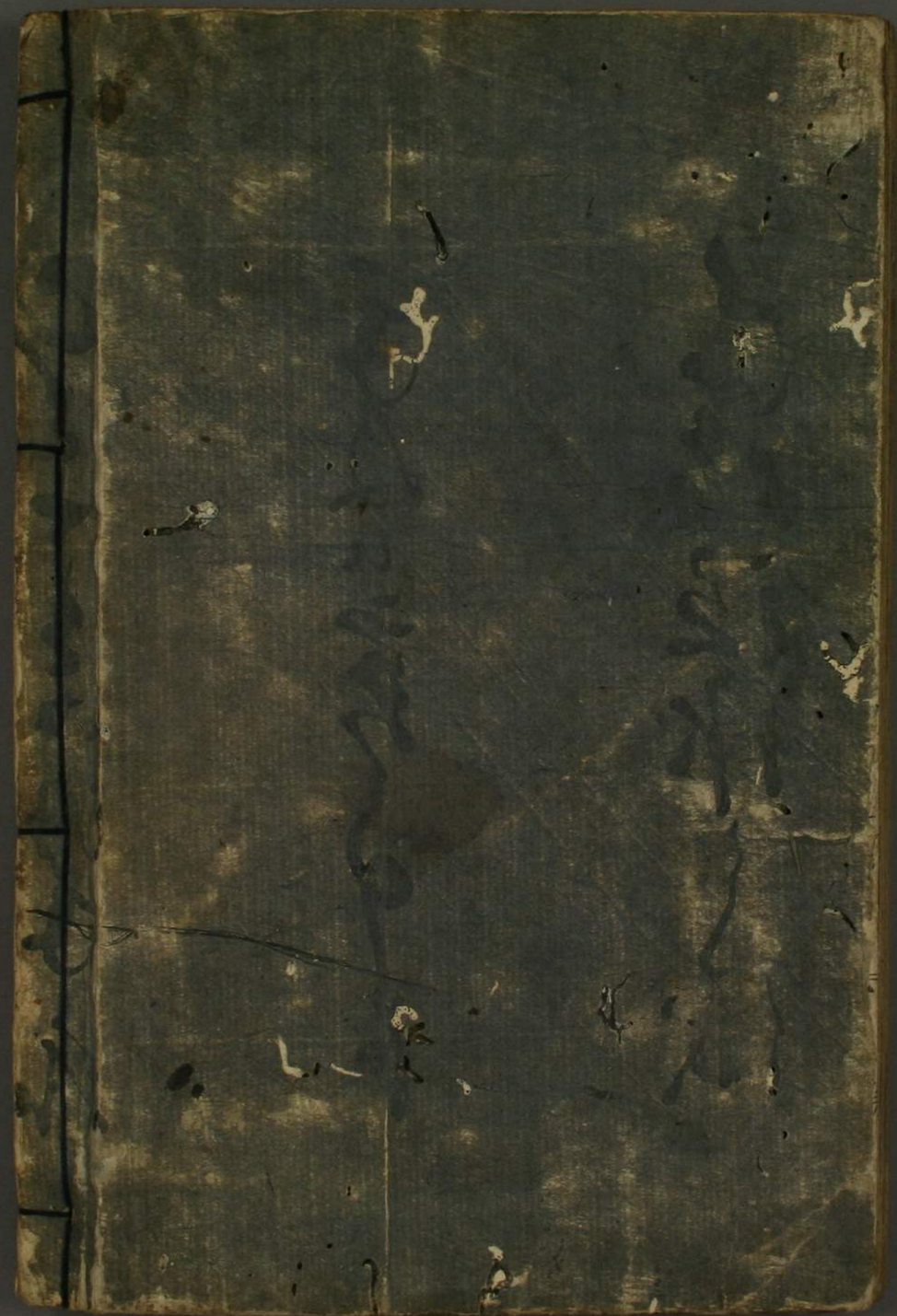
家よりくゆた。如此くみくゑるる。今ゆもあるとえの久ゆかる。
舞の衣裳ハ。跡ようりさーゆひね。と言告めしてよ。と跳ゆを。
聽ゑ橋よ乘移るを。行くもあくゝセビ足平脚平。ゆう肩入まて
墨山ゝ。見ゆ信しゝ。去去よべ。城九郎ハ鄕ゆう物蔭よ立徳
ゆる。全八と面をあつ。倭俳ゑ。と私語あひ。橋よ引ゑる
祈しゝも。平七ハゆ三勝が家を見當。と入まべ門ハ鎖しゝゆ。
隣よゆ家よ立ゆゝ。それがゆさぬる方を向ぶ。主人東の行燈
を指しゝ。見ゆよ三勝ハ。目今人よ招よくゆ。なゆ
あれえゆ。彼ゆへゆく桃灯とそ。彼が乘ゆる橋ゑれと。ゆもあく
ど。ゆ七佶とえゆゆつ。それやつゝハ。とゆひゆけゝ。抱ぶぶくよ追
蒐ゆ。ゆてゆる。怒よ平三ハとの日管領の妻平ゆ。ゆ後猫よ

真葛ゆ糸へゆくべえゆ出来ゝ。申ハ刻ゆ甚処よ動ゑ。ゆのほゆ
時をゆゆ行よ。ゆハ行ハ。三勝ゆ爰ゆ家へ。ゆる比及ゆくんとゝ。
ゆ顧よゆゆ焦燥。昏ゆを喘ゆ。三条河原よ走りゆよ。河原
を東へいそがゆる橋の内ゆ。平垂ゆる振袖を。挑灯の火光よえれば。橋ゆ
大の字の物箇ゝ。紛ふぐゆもあくゝ三勝ゆ。ゆる不審とゆゆゆ。
轎夫どもゆゆ体も。行とゆゆん怪ゝ。引摺ゆる走乘ハ。昼入ゝ衣服
を被ゆゆゆ。ゆの人よハゆ。ゆ一人。ゆ拭ゆゆ面を裏ゆる武士ハ。向よ三
勝ゆ方ゆ償ゆとゆ。ゆゆ家よ来ゆゆ人よ仰ゆゆゆ。矢庭よ橋の袴端
ゆ。ゆ。二ゆの三ゆの押戻ゝ。ゆゆゆ女児を行ゆへゆゆゆゆゆ。
四人ゆゆゆよ。ゆゆゆゆゆゆゆゆ。安ゝもゆゆゆ。ゆハ向ゆゆゆゆ。管領ゆ家ハ。
ゆゆ。ゆ礼ゆゆと叱ゆ退ゆゆ。去ゆゆとする。平三ハゆほゆゆゆ

く。一歩も運らん。管領、「あさましの路こそ違ふらん。いで御身
いくとせべしとのひもあくど。取る特端引めぐ〳〵ちば。蝶九郎ホ大よ怒こく。
この過言ゆゑ狼藉な。這奴息の根。とめうと囲るど。轎夫どもい轎扛
居。打こ〳〵る息杖を。平三内をとりの間こ。右と左へ打ちぐ〳〵つこつけ
入りこく足平が。息杖を奪ひとり。諸臑雑こく雄ぐるる。小備へ撲ち
と打倒し。這あぐらんとするところを。蝶九郎ホ大よ怒こく。
丞泥よ塗丞こく死こぐり。続こく加る脚平へ。胸さらいこく突破らん。咽
と叫こく仆丞殪を。今市ひ駭ひたるぐ〳〵。声をもうけど抜打る。切ちんとす
る刃の光よ。平三こ〳〵〳〵刃刃こ。息杖をりこく受こぐ。追ふこ〳〵つ砕む
ぐ。折〳〵も降来る襲雨よ。蹴揚の泥の赤岩茶ぐ。ともに恐れ右刀
風ゆり蝶九郎ホその隙よ。橋の蓋ヶ撥揚こく。三勝をり撃し。ま拭を

にてこそこそこく。有よ引こみ。逃んとするこ。ま七もこくさ三勝をこの
刃小追蒐来こりこ〳〵。岸の柳よ木ぐ〳〵れこく。刃の容ふいこく〳〵
つ。吐嗟と忽地跳こを。ぐ〳〵べた前よ立こりける。蝶九郎ホ大よ怒こく
ど。ま七こり遮留られころの中六よ瞞。逃とも脱さどとこひ十こぐ
ここを切ど三勝をこら捨こく。打こ〳〵る刃の下へ。ま七が握固
拳を行と衝ぐ。これこ〳〵膝をいこく打〳〵。眼瞳こく刀を捨尻
居よ撞と倒る。を。平七ホ面もこ〳〵。弱こたこぐ。三勝を。腋下ホ
楚と抱込行。ま七よ柔こ〳〵走こ〳〵。平三も全八もこの景迹よ勢ひ
脱。迭よ呆れこく打もあど。双こ一度よ引これ。セ戻せと吸こる声い
ホいこづこ〳〵。蝶九郎ホ耳よ入こりん。刃こ〳〵〳〵起あぐり。仇も身こも
玉鉾の路さへいこぐ暗けれべ。紙燭を索めぐ丞こもこそその

右羊七忠義途小三勝を奪ふ
市蟹蝶郎
今市全八郎
の根羊七
笠屋三勝
尤も勇を奮ひ平三今市ホと戰ふ
笠松平三

人々えんをすくひぬ。

三七全傳南柯夢巻之三終